

# 新羅義寂の著述を通してみる古代韓日佛教交流とその意義

崔<sup>チュエ</sup>

桐<sup>ドン</sup>

洵<sup>スン</sup>

## 目次

### I. 緒言

II. 義寂の生涯と思想（行蹟に関するいくつかの問題）

III. 日本典籍に見える義寂の著述とその思想

一. 日本の浄土系典籍に引用された義寂の無量壽經述義記

二. 法相家典籍の中に見える義寂の唯識思想

三. 日本で発見された『法華經集驗記』

V. 義寂の著述を通じてみた韓日佛教文化交流の意義

### I. 緒言

義寂はたくさんの著作を残しているにもかかわらず、生涯についてはほとんど知られていない。彼は佛教の全思想にわたって、二十五部七十五卷（元曉 八十七部、太賢五十二部、憬興四十部）の著作を残し

ていて、活発な著作活動をした高僧の面目を見せている。しかし、残っている著作は『梵網經菩薩戒本疏』（三或二卷）『法華經論述記』（二或二卷）に過ぎない。ところが、近来になって『無量壽經述義記』が復元され、法華靈驗談を集めた『法華經集驗記』が日本で発見され、義寂思想の復元に重要な手がかりを提示している。これは韓日間の活発な交流があつて初めて可能になったのである。

本論文では、日本に伝わり、日本人の著作の中に引用された義寂の著作、特に浄土系の『無量壽經述義記』、唯識系の『未詳決』『大乘義林廣章』、法華系で、日本で発見された『法華經集驗記』を中心として、古代韓日間の仏教思想交流を考察してみたい。そして、そのような韓日間の文化交流を通じてこれらの発展的な仏教交流を模索してみたい。

## II. 義寂の生涯と思想（行蹟に関するいくつかの問題）

義寂の生涯に関する記録としては、『三國遺事』『義解』第五義湘傳教條では義湘の門徒である十大徳の一人として、『大覺國師文集』には金山寺の僧侶として、そして新羅 圓測の弟子である道證<sup>2</sup>、『成唯識論要集』序文では、汾陽出身<sup>3</sup>として、断片的に見えるだけで、義寂の生涯に関する詳細な伝記はまだ発見されていない。しかしながら、般若・唯識・法華・涅槃・浄土の多様分野にわたる著述<sup>4</sup>に引用されていることから見ると、新羅時代の優れた学僧であつたことは間違いない。

これまで、彼がどのような思想家だつたのかは議論の対象であつた。

一、『三國遺事』では義湘の弟子である十大徳中の一人として、華嚴の學者であるという。

二、後代の著作では義寂を法相系の学者という。

三、義寂が法相系から華嚴へ転向したということと、またその反対に華嚴系から法相へ転向したという。

この問題は現在も韓国仏教界では議論されており、そこには日本古代の仏教学者たちが引用した義寂の著作や義寂に関する研究などが重要な役割をしている。

一、義寂が華嚴思想家であるという点については、海東華嚴の初祖といわれる義湘（六二五―七〇二）が三〇〇名の弟子を輩出したが、義寂がその十大弟子の一人だったという『遺事』の記事に基づいている。

しかし、この遺事に関するほかの記事がないので説得力をなくしている。特に義寂がたぐさんの著作を残しているにもかかわらず華嚴學に関する著作は一つも残していないことや、華嚴家と言える思想の跡を披瀝していないため華嚴思想家ということは認めがたい。

これから見ると、問題の傾向から見ても義寂は華嚴學僧より法相系列の人物であり、義湘の弟子ではなかった可能性もある。『遺事』に記録されている義湘の十大弟子である悟眞、智通、表訓、眞定、眞藏、道融、良圓、相源、能仁、義寂の中で、『法藏和尚傳』では眞定、相源、亮元、表訓を「四英」としており、『宋高僧傳』では智通、表訓、梵禮、道身（道申）を「登堂觀奥者」といっているが、義寂はその中に入っていない。一方、遺事に記録されたほかの十大弟子である眞藏、道融、能仁も華嚴思想家としての活動の跡が見えない。この三人がなぜ遺事に義湘十大弟子として記録されているのかわからないが、義寂も実際は未詳であるが、名前だけ義湘の十大弟子になっているかもしれない。

二、三を検討してみると、義寂が法相から華嚴へ転向したと言うのは均如の著述に基づいた主張である。

均如の『釋華嚴教分記圓通記』によると、義湘と義寂が菩薩の極果廻心の問題について議論した記事が見える。義寂はじめは法藏が送った探玄記のなかの極果廻心の問題を疑ったが、義湘が法藏に尋ね『大料簡』を送ってきて、始めて疑問が解かれたという内容である<sup>9</sup>。この内容から義寂が法相から華嚴へ転向して、義湘の弟子になったと主張したのである<sup>9</sup>。しかし、この主張は「義寂などがはじめて疑問が解かれた」と言うだけで簡単に義寂を義湘の弟子とすることには問題がある。さらに、法相家が華嚴の教説を批判した文證は時折散見されていて、義寂も法相家として義湘の極果について疑問を提示したのである。

すなわち、唯識での極果とは六波羅蜜と十地をすべて体得した究竟の境地であるが、華嚴でそれを「假名菩薩」とするのは耐えられないというのである<sup>10</sup>。しかし、問題は依然残っている。なぜなら、義寂を法相家とする明確な記録がないのである。しかし、ある程度の手がかりはある。義寂の浄土系著書<sup>11</sup>はすべて逸失されたが、幸いに日本の良源（九一二〜九八五）、源信（九四二〜一〇一七）、良忠（一一九九〜一二九〇）、了慧（一二〇三〜一二九〇）、良榮（一三四二〜一四二三）、聖聰（一三六六〜一四四〇）、義山（一二四八〜一七一七）などの彌勒浄土關係の著作で義寂の説をたびたび引用しているのである<sup>12</sup>。

また、義寂の著作は日本の著述目録にはよく見えており、特に法相家の著述にたくさん引用されているので、義寂を法相家<sup>13</sup>と見るのはあまり差し支えないと考えられる。特に義寂は『成唯識論未詳決』三卷、『大乘義林廣章』十二卷などを残したが（すべて逸失された）、日本法相の註疏家たちの著述によると、『未詳決』の義寂は慈恩・圓測などととも唯識六家の一人であり、新羅の代表的な唯識學者として知られているということである<sup>14</sup>。

### Ⅲ. 日本典籍に見える義寂の著述とその思想

一. 日本浄土系典籍に引用された義寂の『無量壽經述義記』

日本の良源（九一二～九八五）、源信（九四二～一〇一七）、良忠（一一九九～一二九〇）、了慧（一二〇三～一二九〇）、良榮（一三四二～一四二三）、聖聰（一三六六～一四四〇）、義山（一六四八～一七一七）などの彌勒浄土關係の著作では義寂の説をたびたび引用している。<sup>15</sup>

その中で良榮の『浄土宗要集見聞』第一の四では、『悲華經』の無淨念王の發願と『無量壽經』の法藏比丘の發願がどの階位にいたるかを説明する中で、次のように義寂の説を引用している。

『悲華經』の發願は信發心と言うが論藏で何時も解くには、「信成就發心は初住であり、解行心發心は初地、證發心は八地以上」と言うに、「悲華發願は信發心である」と言ったのは初住にあたる。この僧侶（義寂）は法相宗學者であるため法相宗に基づいている。それで、法相宗では十信が初住功德になるため信發心が初と言える。<sup>16</sup>

右の内容から見ると、義寂は法相家だったといえるだろう。

日本の平安時代と鎌倉時代の浄土教は新羅の浄土教の影響を受けているとされる。その理由は、平安初期では日本と中國の間の路がたたれ中國の佛教著述の輸入が難しくなったが、新羅とは往来が多かったことで、日本の學僧たちが新羅の佛教典籍を輸入したり、直接筆寫していくものもあった。このため新羅の淨

土教は平安時代と鎌倉時代の日本浄土教を説明するのに重要であるといわれる。重要な新羅浄土教の著作には元暁の『唯心安樂』『無量壽經宗要』『阿彌陀經疏』、憬興の『無量壽經連義述文贊』、玄一の『無量壽經疏』下巻などがあげられる。

一方、新羅の義寂の著述である『無量壽經述義記』は法位の『無量壽經疏』とともに日本の学者たちの章疏に相当引用されており、新羅の浄土思想を説明するにあたって重要な手がかりを提供している。法位の『無量壽經疏』は良忠の『撰擇傳弘決疑抄』、了慧の『無量壽經』、良榮の『往生禮贊私記見聞』『選擇決疑鈔見聞』、義山の『無量壽經隨聞講錄』、懷音の『諸家念佛集』に引用されており、その中では了慧と義山の著述はたびたび引用されている。

また、義寂の浄土系の著述『無量壽經述義記』三卷は良源の『極樂浄土九品往生義』（八回引用）、源信の『往生要集』（一回）、良忠の『徹選擇』（二回）『撰擇傳弘決疑抄』（十回）『法事讚私記』（二回）『觀念法門私記』（一回）、了慧の『無量壽經鈔』（三〇一回）、良榮の『浄土禮贊私記見聞』（三回）『法事讚私記見聞』（七回）『選擇決疑鈔見聞』（七回）、聖聰の『徹選擇本末口傳鈔』（七回）、義山の『無量壽經隨聞講錄』（二二一回）、懷音『諸家念佛集』（一回）に引用されており、特に了慧、義山、良忠、良榮の著述にはよく引用されている。

しかし、義寂の『無量壽經述義記』は逸失されて伝わっていないが、幸いにその重要な内容が日本の浄土系論書に入っていて、復元された。一九四〇年、日本の春日禮智教授は源隆國（一〇〇四〜一〇六六）が撰述した『安養集』など浄土系論書の中の引用文を集めて『無量壽經述義記』三卷を完成した。<sup>17</sup>その後、この復元本の未整備点が発見され、一九五八年、恵谷隆戒教授が再び復元本を出版した<sup>18</sup>。義寂の『無量壽經述義記』は日本の源隆國の『安養集』十巻に引用された抄の中に四十二回にわたって引用され

ており、了慧の『無量壽經』と『往生論註拾遺』、良源の『九品往生義』、恵心の『往生要集』、良忠の『撰擇傳弘決疑抄』『浄土宗要集』、良榮の『浄土宗要集見聞』、聖聰の『大經直談要註記』に引用された内容を参考にして復元された。

特に義寂の『無量壽經述義記』は平安時代以來徳川時代に至るまで日本浄土教学者の著述によく引用され、その影響が大きかった。<sup>19</sup>

一方、義寂の浄土思想のなかには善導や懐感の思想が影響を与えている。義寂の浄土思想は日本浄土教に影響を与え、特に善導の浄土教発展のきっかけになったともいえる。<sup>20</sup>

## 二、法相家典籍の中に見える義寂の唯識思想

義寂の著作は日本の著述目録によく見え、特に法相家の著述にたくさん引用されているので法相家という評価を受けている<sup>21</sup>。特に義寂は『成唯識論未詳決』三卷、『大乘義林廣章』十二卷などを残したが（すべて逸失された）、日本法相の註疏家たちの著述によると、『未詳決』の義寂は慈恩・圓測などとともに唯識六家の一人であり、新羅の代表的な唯識學者として知られているということである。<sup>22</sup>

『成唯識論要集』六卷は唯識六家の註疏を一部の文章としてまとめている。一、有説は窺基法師であり、二、有釋は圓測法師であり、三、有抄は普光法師であり、四、有解は慧觀法師であり、五、有云は玄範法師であり、六、未詳決は義寂法師である。<sup>23</sup>

この内容から見ると、義寂は法相家であることは確かであり、それも有名な唯識家であったのである。特に新羅唯識の系譜は圓測―道證―太賢<sup>24</sup>と伝わるが、道證の著作の中で義寂の説に同感を表しており、

惠沼（七七四―八五〇）の『成唯識論了義燈』では義寂の『未詳決』に対して批判が行われている点、義寂が慈恩の説を批判している点<sup>25</sup>などから見ると、新羅唯識史と関係があるのではないかと言う疑問が起まる。

また、華嚴から唯識家へ転向した可能性については、道證の『成唯識論妖集』によって、はじめは義湘の弟子として華嚴學を研究したが、その後唯識學に関心を持つことになり章疏を著述したという見解もある。<sup>26</sup>

義寂の唯識思想は善珠、眞興、信叡、惠沼、良算、仲算、清範などの著述に引用されている。善珠『唯識義燈增明記』三卷では八識體一説を主張しており、未詳『成唯識論本文抄』四十五卷では染意に対する義寂の見解が引用され、眞興『唯識義私記』では身見などの問題について引用しており、信叡『唯識等抄』では見分と相分に対する見解が引用されており、惠沼『成唯識論了義燈』ではたびたび未詳決（義寂）の見解を扱っている。良算『唯識論同學抄』では邪見に対する見解が引用され、仲算『唯識論私記』では第七識と義寂の『大乘義林廣章』の中に出る空執に対する義寂の主張が引用されている。また、清範『五心義略記』では心と心所に対する見解を引用している。<sup>27</sup>

### 三．日本で発見された『法華經集驗記』

義寂の法華關係著述は『法華經論述記』三卷、『法華經綱目』一卷、『法華經料簡』一卷、『法華經驗記』三卷があるが、伝わっているのは『法華經論述記』だけである。<sup>28</sup>しかし、全体の著作の量から見ると、義寂の法華關係の著作は決して少なくはない。その中で『法華經綱目』と『料簡』をその題目から見ると『法華經』の要義を明かしたものであり、『法華經論述記』は世親の『法華論』を解釈したものである。ま



た、『法華經驗記』では『法華經』修行から得た靈驗を集めたものであるため、当時の法華信仰を考察できる重要な資料である。これらの著述から見ると、義寂は新羅時代の他の法華著述家とは異なり、法華信仰と教學を兼備した人物であることに大きな特徴がある。

『法華靈驗傳』の編纂の意圖は後世の人々を發心させることにあり<sup>29</sup>、『法華經』の靈驗を集めてそれを後学に見せ、『法華經』の宗旨を正しくわかるようにしたいという意志の現れである。義寂は經の四句乃至一文字でも讀誦・書寫・聽聞する功德は数えられないほど大きく、この經を信じるとたくさんの福德を得られるのでこの『集驗記』を編纂すると明かしている。

これまで義寂の『法華經驗記』または『集驗記』は逸失されその内容がわからなかったが、それが日本で筆寫されて伝わったのである。それがまさに『法華經集驗記』であるなら<sup>30</sup>、韓国靈驗傳の嚆矢であるこの著作の内容を知ることができて本当に幸いである。義寂が法華に対する靈驗傳を撰述したのは、彼の法華に対する関心とともに彼の法華信仰を表していると思う。

この本は『法華經集驗記』二卷になっており、これまでの『驗記』・『法華驗記』三卷といったもの<sup>31</sup>とは異なる。構成は上下兩卷、諷誦・轉讀・書寫・聽聞の四編になっており、上下卷には序文があるが、特に下卷には「并序沙門寂撰」として義寂が撰述したことを明記している。筆寫本は上卷 七紙 一四二行、下卷 五紙 一三六行の計十二紙二七八行である。序文を見ると、

至るところに伝わる靈驗を選び、記録された秘藻を集めて二卷を作り、それを分けると四編になる。<sup>32</sup>

として、いろいろな典籍の靈驗事跡を集めて編纂したことを明かしている。上卷には最初に總序があり、つ

づいて諷誦第一には二十二編の靈驗説話を載せ、下巻には別序を初めとして轉讀第二に三編、書寫第三に九編、聽聞第四に五編、計三十九編を収録している。

ここに引用された靈驗談の出所は『東夏三寶感動錄』・『集神州三寶(感動)記』・『觀世音應驗記』・『要集』・『高僧傳』などである。その中で『東夏三寶感動錄』と『集神州三寶感動記』の靈驗談が最も多く載せられている。しかし、この二つの靈驗傳は混用されているので同じ本ではないかと考えられる。この本の現存本は『集神州三寶感通錄』にあたり、この本と『集驗記』を比較すると『感通錄』卷下「初列感應名緣條」と同じような『集驗記』諸編の内容が収録されている。現在の『集驗記』三十一編の中、靈驗談の三十三が『集神州三寶感通錄』から採取したものである。

書寫の時期については、この『法華經集驗記』の末に「嘉應二年 庚寅戌二月十八日 傳得之釋子有慶(在判)」（一一七〇）と書かれているが、義寂の『集驗記』にも入っている百濟の發正の靈驗談が『觀世音應驗記』増補部に入っていて、この増補部の年代が貞觀十三年（六三九）であるので『驗記』は安朝（八〇〇—一一二〇）初に書寫されたと思われる。<sup>34</sup>

『集驗記』の内容中、韓国のもものは百濟の發正の話だけであり、他は全部、『集神州三寶感通錄』の中国の靈驗談である。釈迦在世時の話から唐の貞觀、龍朔代までの靈驗で、これは『法華經』が讀誦、書寫、講説され広く信仰されていた事を表している。

『法華經集驗記』の編纂體制は『法華經』で説かれている固有行法である受持・讀・誦・解説・書寫の五種法師<sup>35</sup>と類似している諷誦・轉讀・書寫・聽聞の四つで靈驗談を分類している。『法華經』の行法の中、讀・誦・解説・書寫は『法華經』受持のためであり、解説と聽聞の關係は主客の對象の關係である。結局、義寂は『法華經』の修行體系の充実のために『集驗記』を作っていることがわかる。

ところで、靈驗傳を構造的な側面から見ると、義寂が最もよく引用した『感通録』は靈驗談を感應名條に全部集めたのに比べ、『弘贊法華傳』は翻訳・講解・修觀・遺身・誦持・讀誦・書寫で構成されており、これを受けついで『法華傳記』は傳譯・講解・諷誦・轉讀・書寫・聽聞になっている。結局、『法華經集驗記』と『弘贊法華傳』、『法華傳記』は全部類似な構造となっているのである。また、上の出典から見たように、義寂の『集驗記』の中で引用出所がないものや『感通記』にはない内容が『弘贊傳』や『法華傳記』には入っているため、相互の関連性は否定できないと思われる。義寂の『集驗記』に入っている發正の話が載せられた『觀世音應驗記』は貞觀十三年（六三九）であるが、義寂が主に引用した『集神州三寶感動記』の現行本である『集神州三寶感通錄』は唐麟德元年（六六四）になっているため、『集驗記』は六六四年以後の撰述<sup>36</sup>となるだろう。また、『弘贊法華傳』の撰者慧詳は『古清涼傳』を唐高宗の六八〇〜六八三年に完成した<sup>37</sup>と言っているので、この時期を前後にして『弘贊法華傳』が撰述されたと見ると、義寂の撰述と同じ時期に撰述され、『弘贊傳』の類<sup>38</sup>と義寂の『法華經集驗記』の相互影響も考えられる。それから見ると、『大日本國法華經驗記』序で書かれているように、「唐時代に義寂法師が『驗記』を作った世間に流布した」<sup>39</sup>とあり、『集驗記』に出る靈驗談が『弘贊法華傳』や『法華傳記』などに出ることから、義寂の『法華經集驗記』が広く流布され法華靈驗傳の編纂に影響を与えた可能性も排除できないと思う。また、さらに『日本法華經驗記』の撰述にも刺激を与えた<sup>40</sup>と思われる。

#### V. 義寂の著述を通じてみた韓日佛教文化交流の意義

義寂に関する資料を検討してみると、彼は新羅の武烈王代から成徳王代（AD六〇〇年代中期―七〇〇

年代初期)の人物であった。彼の思想的立場は行跡と引用典籍から見て、法相家と言える。義寂は浄土、唯識、法華に至るまでたくさん著作を残しているが、平安時代と鎌倉時代以降の韓日間の頻繁な往来により、浄土、唯識、法華系の著作が日本に伝わり、両国の仏教文化交流の発展に重要な影響を与えたと思われる。浄土教の著述である『無量壽經述義記』は元暁の『唯心安樂道』『無量壽經宗要』『阿彌陀經疏』、憬興の『無量壽經連義述文贊』、玄一の『無量壽經疏』などと共に、平安時代と鎌倉時代の浄土教に影響を与え、日本に伝わった義寂の著作は日本章疏に残されており、韓国で散佚された義寂の著述と新羅時代の浄土思想を説明するにあたって重要な資料になっている。

義寂の唯識思想は善珠、眞興、信叡、恵沼、良算、仲算、清範などの著作に『未詳決』『大乘義林廣章』など彼の唯識説が引用されていて、義寂の唯識思想を考察する際に大きな役割をしている。また、近年に発見された『法華經集驗記』は逸失されその全貌がわからなかったが、日本で筆寫され伝わったため日本法華靈驗傳の成立に影響を与えた。

このように義寂の著作を通じてみる古代韓日間の仏教交流は両国の仏教文化の解明に重要な役割を果たしている。地理的にも歴史的にも最も近い韓日両国は同一の仏教文化の背景を持っていて、その交流の必要性は歴史が明らかにしている事である。したがって、韓日間の仏教文化交流は未来のためにも最も重要な課題であると思う。

—このような意義深い場で拙見を発表する機会を与えてくださった岐阜聖徳学園大學佛教文化研究所長と関係各位に誠に感謝します。ありがとうございました。

- 1 // 維年月日 求法沙門某 謹以茶菓之尊 祭于新羅大法師故金山寺寂公之靈 日余曾讀海東僧傳 曰見法師之道之德之行之願 『大覺國師文集』 卷十六、「祭金山寺寂法師文」(韓國佛教全書 卷六、p. 五五五中)。
- 2 金煥泰、『韓國佛教史 概説』、(p. 八八、九六) 李萬、「法相關係 論疏部 新羅人編 撰述書(三)」(佛教學報 二九輯 佛教文化研究院)、p. 二四五参照。
- 3 「汾陽之寂由穿鑿見知」善珠述、『唯識義燈燈明記』 卷一(大正藏六五、p. 三四二上)中。
- 4 『韓國佛教撰述文獻總録』、東國大學校 佛教文化研究所、p. 六一
- 5 金相鉉、新羅華嚴學僧伝 系譜編 活動、(『韓國華嚴思想史研究』、民族社)、p. 二七。
- 6 全海住、『義湘華嚴思想史研究』、民族社、一九九三、p. 九九
- 7 全海住、上掲書、p. 一〇六、この本で著者は「義寂は華嚴學僧より法相家として知られている」と述べている。
- 8 『釋華嚴教分記圓通』 卷一(韓國佛教全書 卷四、p. 二五七上)。
- 9 金相鉉、上掲書、p. 二八。
- 10 高翊晋、『韓國古代佛教思想史』(東國大學校出版部、一九八九)、p. 三五〇。
- 11 『涅槃經綱目』 一一 一卷、『涅槃經疏』 十六卷、『涅槃經義記』 五卷、『涅槃經云何偈』 一卷、『無量壽經疏』 三卷、『無量壽經述義記』 四卷、『觀無量壽經綱要』 一卷、『觀無量壽經疏』 一卷、『彌勒上生經了簡』、『韓國佛教撰述文獻總録』、pp. 六一〜六三。
- 12 安啓賢、『新羅淨土思想史研究』(玄音社、一九八七)、p. 二二三。
- 13 義寂の著作が『諸宗章疏録』 卷一、『釋教諸師製作目錄』 卷三、『注進法相宗章疏』 などに多く見られ

- るので法相家としてみる人が多いという。春日禮智、「新羅の義寂とその『無量壽經述義記』」（蔡印幻・金知見、『新羅佛教研究』、山喜房佛書林）、p. 三七 春日禮智編、『無量壽經述義記』（眞宗學研究所發行）参照。
- 14 惠谷隆戒、「義寂の無量壽經述義記について」（佛教大學研究紀要 三五號、佛教大學學會 一九五八）、p. 二一。
- 15 安啓賢、『新羅淨土思想史研究』（玄音社）、一九八七） p. 二二三。
- 16 「——然悲華發願信發心者當初住 此師法相宗學者 故可依彼宗 然相宗意 十信爲初住功德 故信發心者是可初住。」淨土宗全書 卷二一（山喜房書林）、p. 三一五上〜下。同じ内容が下の部分でも再び明かされている。
- 17 春日禮智編『無量壽經述義記』、眞宗學研究所發行）、昭和一五
- 18 惠谷隆戒、復元本『無量壽經述義記』三卷（『佛教大學研究紀要』三五號、附録）
- 19 松本文三郎、春日禮智編『無量壽經述義記』序文、p. 六。
- 20 惠谷隆戒、「義寂の無量壽經述義記について」（『佛教大學研究紀要』三五號、佛教大學學會 一九五八）、p. 一一一。
- 21 義寂の著作が『諸宗章疏録』卷一、『釋教諸師製作目錄』卷三、『注進法相宗章疏』などによく見えるので、義寂を法相家と見る人が多いと言う。春日禮智、「新羅の義寂とその『無量壽經述義記』」（蔡印幻・金知見、『新羅佛教研究』、山喜房佛書林）、p. 三七と春日禮智編、『無量壽經述義記』（眞宗學研究所發行）参照。
- 22 惠谷隆戒、「義寂の無量壽經述義記について」（『佛教大學研究紀要』三五號、佛教大學學會

- 一九五八)、p. 二一.
- 23 「要集六卷總寄六家語共演一部之文 一者 基法師也 二者有釋 測法師也 三者 光法師也 四者 有解 觀法師也 五有云 範法師也 六未詳決 寂法師也」善珠述、『唯識義燈增明記』卷一(大正藏 六五、p. 三四二上).
- 24 照遠、『梵網經古迹記述迹抄』卷一.
- 25 仲算撰、『法相宗賢聖義略問答』第四(大正藏 七一、p. 四三五中〜下).
- 26 李萬、『法相關係論疏部 新羅人編 撰述書(二)』(『佛教學報』 第二八輯、東國大學校佛教文化研究院)、p. 一五〇.
- 27 李萬、上掲書、p. 一五〇—一五二.
- 28 李萬、上掲書、p. 一五〇—一五二.
- 29 了圓撰、『法華靈驗傳』(『韓佛全』六卷、p. 五四四上).
- 30 義寂の『法華經集驗記』の實在を最初に発表したのは『史學雜誌』第二二號(東京大文學部史學會、一九五八、p. 七九)以降、太田晶次郎、「寂法師の法華經の驗記は現存する」(『日本歴史』第三九〇號、p. 八五)が出て、義寂『集驗記』全体を紹介した東京大學圖書館藏『法華經集驗記』(『貴重古典籍刊行會叢書』、一九八一)が出るようになった。
- 31 「法華經驗記三卷 義寂『東域傳燈目錄』法華部(大正藏 五五、p. 一一五〇上).
- 32 「撰諸傳之靈驗 僅抽衆記之秘藻 集成兩 分爲四篇」『法華經集驗記』(『東京大學校圖書館藏 法華經集驗記』、貴重古典籍刊行會、一九八一).
- 33 太田晶二郎、上掲書、p. 八五.

- 34 『史學雜誌』第六七編 一二號、展示目錄 第一函（東京大文學部 史學會、昭和三三） p. 七九  
『貴重古 典籍刊行會叢書』（『法華經集驗記』、『法華經集驗記解題』）、p. 一下。
- 35 塩田義遜、『法華經と行法に就て』（『日本佛教學會年報』第十會）pp. 二二—三二 参照。
- 36 義寂の生涯は前で六三〇年代から七〇〇年代初期に推定され、集驗記の内容から崔義起と仁孫子が龍朔三年（六六三）の靈驗談である。
- 37 『古清涼傳』（大正藏 五一・p. 一〇九二）…△佛光大辭典▽卷二・p. 一六一—三三中。
- 38 法華經靈驗傳は『高僧傳』、高僧たちの靈驗を集めたのが『弘贊法華傳』であり、これを受けついで  
僧祥の『法華傳記』、そして『法華經顯應錄』の順に編纂された。（吳亨根、上掲書、p. 三二—）
- 39 「中比巨唐有寂法師 製於驗記 流布于世間」『法華經集驗記』、  
太田晶二郎、『法華經集驗記解題』、上掲書（註三九参照）、p. 一。
- 40